

## 〈書 評〉

丸山俊一『14歳からの資本主義—君たちが大人になるころ  
の未来を変えるために』（大和書房，2019年2月）

### 〈欲望の資本主義〉をめぐる多面的問題群 —偉人たちの洞察を活かして—

塚 本 恭 章

本書の表題と副題が端的に示しているように、著者の主眼は「資本主義」というものを「14歳」という若い未来の年代（中学生）向けに丁寧に語り直すことである。むろんけっして容易な課題ではない。とはいえ、表現や文体を可能な限り平易にし、経済学の理論と思想についての専門的な内容もそれほど抵抗なく理解できるよう工夫がなされている。好感のもてる執筆スタンスといえるだろう。

一読すればただちに分かるように、本書で扱われている資本主義をめぐる一連の多面的問題群は世代をこえて重要な意味をもつものばかりで、読者年齢の壁はないといってよい。「この10年で世の中は大きく変わります」、そしていまは「正解のない時代」と著者の丸山氏はいう。一見迂遠にみえる「資本主義」をあらためて氏が深く問い直そうとする理由のひとつであろう（氏は反響の大きかったNHK ドキュメンタリー番組「欲望の資本主義」の制作統括者であり、当該番組の内容は第3弾まで書籍化されている。2019年7月14日にはその特別編「欲望の貨幣論」もBS1にて放送された）。

では、われわれが日々生き暮らす〈資本主義〉というしくみは、いかなる経済学の原理や社会思想にもとづき、それらの関係はこれからどうなりうるのだ

ろうか。「変わる」もの、「変わらない」ものは何であろうか。むしろこうした根源的な問いへの解答はひとつでない。そもそも現代の主流派である新古典派経済学においては、資本主義よりは〈市場経済〉という概念が中心となり、〈資本主義〉を真正面から扱おうとする理論的装置を有しているのか。むしろマルクスやケインズらの経済理論にこそ、〈資本主義〉を問い直すための優れた洞察が数多く含まれていないだろうか。〈資本主義〉についての雄大な学説・思想史的な系譜の全体像をあらためて検討し直す試みも欠かせないはずである。多様な経済・社会現象の背後にある原理（ロジック）や力学、イデオロギーないしは社会思想を正確に把握することこそが、これからの資本主義のゆくえを俯瞰するうえでの鍵となるのだから。

グローバル化やインターネットを基盤とする高度情報化・デジタル社会の功罪、経済成長と革新的テクノロジーとの相関、格差・不平等そして分断社会の諸相、成長資本主義の不安定性、GAFAの衝撃、主流派経済学が前提とする合理的経済人の虚構さと行動経済学の新たな胎動、欲望と資本主義のかたち、ルールのありかたなど、本書は幅広い世代に通じうる重要かつ多様な問題群を明快に扱っている。とりわけ本書で著者が強調しているのは、ITやデジタル技術にもとづくグローバル化が多国間で促進されることをつうじて経済的な「不均衡」ないしは「不安定性」（格差・不平等・分断をふくむ）を助長していること、そして現代の資本主義社会では、人間の感情や共感もまた「商品化」され、それらは絶えず「差異化」されていくという点だ。

1990年代初頭の冷戦構造の終結以降、アメリカの自由主義と民主主義のシステムを世界的に普及させる動きとしてのアメリカナイゼーションをグローバルイゼーションと呼称することからすれば、自国第一主義を標榜するトランプ大統領のアメリカ・ファーストこそいまや脱グローバル化（新重商主義化というべきか）の中心であり、それはまたイギリスのEU離脱（ブレグジット）にも通じうる問題といえよう。今なおグローバル化の功罪が問い直され続けており、現時点では、グローバル化の〈罪〉のほうがより意義深さを増していないか。「グ

丸山俊一『14歳からの資本主義—君たちが大人になるころの未来を変えるために』（大和書房，2019年2月）

ローバル化」と「脱（ないしは反）グローバル化」をめぐる錯綜した因果関係を国際情勢に照らして深く精査しなければならない。

他方、資本主義いうしくみを推進しているのは、実際のところきわめて「シンプルな原理」（収入－費用である利潤の増大）であり、人間が潜在的にもつ「欲望」を媒介しながら、まさに「やめられない、とまらない」資本主義の論理が強化されている。岩井克人氏のいう先進資本主義諸国における産業資本主義からポスト産業資本主義への移行という資本主義の構造変化によって、差異の意識的創造としての資本主義の基本原理が貫徹し、新たなテクノロジーが新たな欲望を生み出し続けているわけである。それは人間と企業組織（における雇用）、人間と社会との関係をどう変容させうるのか。さらにいえば、こうした資本主義はこれからも自壊することなく存続できうるのか、それとも資本主義へのオルタナティブ（21世紀型社会主義など）が生まれうるのか、きわめてスリリングな問いかけではないだろうか。

もうすこし別の角度から眺めてみると、資本主義のいわゆる〈終焉・限界〉を説く論者がここ数年に増してきている。ハーヴェイ『資本主義の終焉』やシュトレーク『資本主義はどう終わるのか』、伊藤誠『資本主義の限界とオルタナティブ』（いずれも2017年の刊行）などである。その先駆をなしたのが、水野和夫氏の『資本主義の終焉と歴史の危機』（集英社新書，2014年）であり、多くの読者を獲得した作品として広く知られる。金利（利子率）、成長率そしてインフレ率がいずれも低水準で推移し続ける日本資本主義の実態は、絶えず「資本（利潤・利子）」を大きくするしくみとしての資本主義から大きく乖離しているという事実認識を看過することはできず、水野氏は数百年に及んで存続してきた「資本主義の終焉」はその意味でもまさに「歴史の危機」であると説いている。総じて丸山氏の当該本書や上記の制作統括番組も、こうした資本主義と日本・世界経済をめぐる長期的で大きな学問的情況を反映し、そのなかで生まれえた作品とみなすことができるだろう。問題意識の基本は明確に共有されているのだ。

人間が本性的に秘める「欲望」というキーワード。本書はマルクスやケインズ、シュンペーターらの偉人、ダニエル・コーエン、マルクス・ガブリエルそしてトーマス・セドラチェックら現代の批判的知性の洞察も積極的に活用されている。時代が彼らの肉声を求めているのだろう。明確な解答でなくさまざまな問題提起をおこなう本書にある種のもどかしさを感じる読者もいるだろうが、転換期を迎える世界経済と資本主義のゆくえを展望するうえで、本書は多くの知的関心を喚起してくれる好著である。ぜひ多くの方に一読を推奨したい（なお本書は3年次春学期の専門演習Ⅰの輪読文献として活用した）。

## 関連文献

塚本恭章 [2018a] 「資本主義はどこへ向かうのかー現代の批判的知性による多面的精察ー」『経営総合科学』（愛知大学経営総合科学研究所）第109号，155-171頁。

塚本恭章 [2018b] 「資本主義をめぐる思想と理論を問い直すー新自由主義とグローバル化に對抗するオルタナティブへー」『現代思想』（青土社）4月号，162-173頁。